

インターンシップ受け入れ先であいさつする熊谷さん(左から2人目)



相手目線の大切さ実感

熊谷 美菜子 (人間科学3)

私は将来、海外に関する仕事がしたいと考えており、海外インターンシップに参加しました。今回一番に学んだことは、異文化に触れる楽しさでした。

ベトナム人という自分とは全く異なるバックグラウンドを持った人々と話すのはとても楽しかったですし、ベトナムという地に触れたことも、とてもいい経験になりました。現地では大抵英語で話していたのですが、う

のがたくさんありました。「来年の海外インターンシップをプランニングする」という課題でもこの見方は生かされました。行程はもちろん、価格設定や説明会の日程まで詳細に決めることがお客様を呼ぶためには必要だと分かりました。また、一緒にインターンに参加したほかの学生と話し合いながら決めたことも多いのですが、遠慮せず、「良いところ」「悪いところ」も伝えることが、最終的にはその人のためになることを痛感しました。

3年次の夏休みに2週間という長期間、ベトナムに滞在したことはかなりの貴重な経験でした。新たな目線で日本を見つめなおすことができ、また、自分が今後、何をしたいのか改めて認識する機会となりました。

また、自分が抱いていたセブのイメージがどんなに狭かったかを実感し、ゼミ生一同が成長することができました。

三田さん(左から5番目)と日本語学校の生徒たち



教え合い生徒と仲良く

三田 健太郎 (商3)

私はベトナムで2週間、主に日本語学校でインターンシップに参加しました。海外は初めてですが、大学で留学生の日本語学習の補助をするキヤンパスアシスタントとして、他の国の人々と交流したり、日本語を教えたりする中で、日本の文化や言語を伝えることに興味を持ち、プログラムに応募しました。

前半の1週間は、ベトナムに進出している日系企業を訪問したり、ハノイ市街を視察したりと、ベトナムについて知識を深めました。そして後半は日本語学校でティーチングアシスタントを務めました。

日本語学校は20代の学生が多く、ほぼ同じ世代のベトナムの生徒に教えたいという形でした。私は日本の文化や伝統を伝える中で意識したことがあります。それは日本語学校の生徒に教えるというよりは、共に学ぶという姿勢です。

この経験を生かして、大学内でも、留学生に積極的に話しかけ、相手が伝えたいことをしっかりと傾聴して、よりよい関係を築きたいと思えます。そして、国境を超えた友達がたくさんいる大学生を送りたいと思います。

今まで写真や文献を通して植民地化や宗教について学んできてはいましたが、その内実は実体験がよくなりました。現場で得た知識と気付きを大切にして、今後の勉強に役立てていきたいです。

寄稿

ベトナムでインターンシップ

海外のビジネス現場で就業体験することによって、異文化理解を深め、国際社会に通用するスキルを高めることを目的に、キャリアデザインセンターでは今年度、海外インターンシップを開始した。8月末から2週間にわたりベトナムで実施され、旅行代理店「三進インターナショナルハノイオフィス」と日本語学校で5人が就業体験を行った。このうち2人に感想をつづってもらった。

生徒の中はうまく日本語を話せない人もいました。そういった生徒に対しては、しっかりと傾聴して、何を伝えたいのかをくみ取り、そして黒板を使ったり、写真を見せたりして分かりやすく説明しました。

言葉がうまく通じなくても、しっかりと話を聞いてあげることが大切だと気づきました。聞く姿勢が互いの信頼につながると思えます。海外で働く上で、コミュニケーションを取ろうとする姿勢が重要だということを感じました。

この経験を生かして、大学内でも、留学生に積極的に話しかけ、相手が伝えたいことをしっかりと傾聴して、よりよい関係を築きたいと思えます。そして、国境を超えた友達がたくさんいる大学生を送りたいと思います。

回りの合宿では、植民地時代に建てられた教会や史跡、それらの歴史をまとめた博物館などを巡り、当時から今につながる信仰のかたちを学ぶことができました。

文・井上ゼミ セブ島で合宿

スペイン植民地時代の歴史をテーマにする文学部人文・ジャーナリズム学科の井上幸孝ゼミは、9月6日から10日までフィリピンのセブ島などで合宿を行った。フィリピン合宿は2015年のマニラに続き2回目。ゼミ生7人は合宿中、移動のほか調査、食事でも英語を駆使して自身の足で動き回った。

寄稿



「幼子イエス」に見る信仰のあつさ

神山 麻菜 (4年次)



1521年に探検家マゼランが贈呈した「幼子イエス」の木像のこと。度重なる戦禍を乗り越えて現存していることから、多くの人が祈りをささげに訪れていました。また、街を歩けばレジの横や車の運転席などさまざまなところでサント・ニコ像を見かけることができます。その存在がいかに身近であるかを肌で感じました。



観光地としてではなく、植民地時代のセブを感じることができたゼミ合宿でした。私たちが訪れた場所には日本の観光客がほとんどおらず、街を歩いていると珍しそうなお目で見られることがしばしばありました。特に印象に残ったのはカサ・ゴロルドとサン・ペドロ要塞です。中には当時使われた大砲や聖なる井戸がそのまま残っていて、統治者側の視点を知ることができました。第二次世界大戦では日本軍の捕虜収容所として使われていました。実際に訪れてみると知り得ないことがまだあると気づきました。また、比較的アジア系の観光客が多く、要塞の中の広場にあった「HERBOTH」というインスタグラム用の看板には驚きました。

合宿ではセブ島に隣接するマクタン島にも滞在しました。セブシティに比べ、高層ホテルがたくさんあり食事は倍以上。経済的な格差を感じました。また、自分が抱いていたセブのイメージがどんなに狭かったかを実感し、ゼミ生一同が成長することができました。